

資 料

共感経験尺度改訂版 (EESR) の作成と共感性の類型化の試み

角 田 豊¹

AN ATTEMPT TO CONSTRUCT THE EMPATHIC EXPERIENCE SCALE REVISED (EESR) AND ESTABLISH A TYPOLOGY OF EMPATHY

Yutaka KAKUTA

It is necessary for empathy not only to share feelings with another, but also to appreciate the individuality between oneself and an other person. The purpose of this study was to construct a questionnaire, Empathic Experience Scale Revised (EESR). Insufficient sharing experience (ISE) items in addition to sharing experience (SE) items were prepared, and 157 male and 145 female students were asked to answer those items together with LSO and Self-consciousness Scale. After factor analysis, the Scale of SE (10 items) and the Scale of ISE (10 items) were selected. Then the typology of empathy (Type double-dominant, Type dominant of SE, Type double-recessive, and Type dominant of ISE) was attempted. ANOVA by typology and sex on LSO-E (subscale of LSO) measuring the belief in individuality of human beings indicated that Type double-dominant differentiated oneself better from the other than Type dominant of SE. Consequently, the typology of empathy by EESR had a criterion-related validity while other results showed the characteristics of each type.

Key words : empathy, experience, questionnaire, typology, appreciation of the individuality.

問題と目的

共感性の研究を概観すると、他者の感情を感じる点に重きをおく感情的アプローチと、他者の感情を認知する点に重きをおく認知的アプローチに大別され、さらにそれらを結びつけて共感を理解しようとする流れにある(角田, 1993b)。質問紙による共感性の測定を見た場合、上記の2つの視点を含んだ質問紙としては、例えば Davis (1980) の Interpersonal Reactivity Index がみられるが、2つの立場を統合した単一の指標としての共感性質問紙は確立されていない。共感性と他の人格特性や行動との関連を研究する場合には、基礎的な共感性の指標の確立が必要と考えられる。

角田 (1991, 1992) は従来の研究の批判・検討から、共感性質問紙に必要と考えられる5つの観点をあげた。

①情動伝染など受動的で他者理解には至らない内容を含まない。②客体(相手)と同様の感情体験がなされ(感情的アプローチに基づく)、一般的な態度のみを内容としない。③客体の立場に立つ(パースペクティブ・テイキング)視点を含む(認知的アプローチに基づく)。④共感的な内容は社会的に望ましいと考えられ、偽りの反応が生じる可能性がある。その効果をできるだけ除くため、過去の経験という制約を設ける。⑤感情の種類(喜び、悲しみ等)に幅をもたせる。以上から、共感経験尺度(empathic experience scale, 略称 EES) が作成された。因子分析の結果からは、次のような3因子構造を持つことが明らかとなった。第1因子は「相手の否定的な感情体験に対する共感の因子」(「悲しんでいる相手の気持ちを感じとう

¹ 奈良女子大学 (Nara Women's University)

として、自分もその人の悲しさを経験したことがある”等8項目：第1尺度）であり、第2因子は逆転項目からなり「対人関係の保持の因子」（“相手の気持ちを感じとろうとしたことはない”等7項目：第2尺度）、また第3因子は「相手の肯定的な感情体験に対する共感の因子」（“相手が何かを期待しているときに、そのわくわくした気持ちを感じとったことがある”等5項目：第3尺度）であった。EESは質問紙レベルにおいては、Mehrabian&Epstein(1972)による情動的共感性尺度（加藤・高木、1980）との相関から基準関連妥当性をもつことが確かめられ、またより精細な比較分析から上記の観点を満たすものと考えられた（角田、1991）。さらに、構成概念妥当性を検討するため、他の測定法との比較として、幼児の生活場面を撮影したビデオを刺激とし、自己記述と生理反応が求められ、EESとの関連が検討された（角田、1992）。

その結果、モデルの肯定的な感情表出に対しては、EESは妥当性を持つと考えられたが、悲しみといった否定的な感情表出に対する際、EESの高得点者の中に共感と同情が混在することが見いだされた。ここでいう同情とは、共有体験はなされているが、他者理解としての共感にはいたらない反応で、共有体験をしながらも、自己中心的な観点から自らの体験を捉えるため、他者を理解する方向でその体験を捉えられないものとされた。また、角田（1993a）はEESと、被験者が子ども時代に母親からどのように感情を受容されていたかの関連を検討し、Kohut（1971）の自己対象機能の観点から共感性の成立基盤について考察した。以上のように、EESは一応の成果をあげているのだが問題点も見られ、共感性尺度として確立するためには、さらに改善が必要と思われる。

本研究では妥当性を高めるべく、EESを改良し「共感経験尺度改訂版（empathic experience scale revised：略称EESR）」の作成を行う。共感の概念規定は、角田（1991）における「能動的また想像的に他者の立場に自分を置くことで、自分とは異なる存在である他者の感情を体験すること」とするが、特に強調されるべき点は「自分とは異なる存在である他者」にあり、自己と他者の個別性の認識が確立されていることによって、共有体験が他者理解につながるものとする。

角田（1992）の結果に示されたように、EESにおける共感経験のみを問う形式では、自己の共有体験を他者理解に生かせない同情反応と共感反応は識別されにくい。共有体験を他者理解に結びつけることができる共感者と、同情反応を呈する同情者を理論的に想定した場合、両者はどちらもEESに対して高得点群に位置す

ることになる。同情者の場合、上記の観点①に見られる他者理解への指向性あるいは能動性を測定しようとするEESの意図が反映されず、ただ共有体験があったことから、EESに肯定的に反応することになる。同情者にとっては「自分が感じる」ことに意味があり、他者理解をしているとの自己知覚は持つかもかもしれないが、実際には他者理解に至っていない。したがって、EESの質問項目は「共感経験」を測定しているとはいえずより広く「共有経験」の測定尺度ということになろう。

ここで逆の体験、すなわち共有不全経験を問われた場合を考えてみたい。現実の対人関係場面では、常に他者に共感できるとは限らず、むしろ相手の状況に関する情報が少なかったり、主体の側の心理状態やこれまでの相手との対人関係のあり方から、共感できないことも多いといえる。他者との共有体験が得られない経験は、個としての自他の区別をはっきりと主体に認識させることになり、自分と他者は異なるのだという個別性の認識を高める（橋本、1987、1991）。共感者においては個別性の認識が高いため、他者の気持ちがわからなかった経験を明確に意識して答えることができると考えられる。しかしながら、同情者の場合は、自己中心的な自他認識ゆえに、他者の気持ちがわからなかった経験そのものが意識されにくいと考えられる。したがって、共有経験と共有不全経験の両面を測定することによって、自他の個別性のあり方を評価することが可能となり、共感と同情を識別できるものとする。理論的には、FIGURE 1に示すように共有経験と共有不全経験の2軸から、4つの類型を想定することができる。Aは両方の経験があると答える傾向にある「両向型」で、先の概念規定による共感性が最も高いと考えられる。Bは共有経験は高いが不全経験は低い「共有経験優位型（共有型）」で、上述の同情に該当する。ただし、他者の喜びなど肯定的な感情に対する経験も含まれるため、否定・肯定両感情を含む広義の分類とする。自他の個別性の認識、他者理解の観点からすると、未熟な共感といえる。Cは両方の経験がないと答える傾向にある「両貧型」で、個別性の認識が弱く、対人関係に肯定的にも否定的にも開かれておらず、共感性は最も低いと考えられる。Dは不全経験が高く共有経験の低い「共有不全経験優位型（不全型）」で、個別性の認識はなされているが、そのことがむしろ対人間の隔たりにつながっており、容易に他者は理解できないと感じているものと思われる。

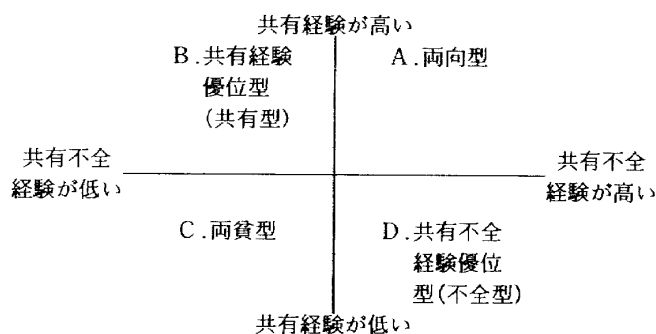


FIGURE 1 共感性の類型化

本研究の目的は以下のとおりである。

(1) EESR を作成し、共有経験尺度と共有不全経験尺度の得点分布から共感性の類型化を行う。

(2) EESR が個別性の認識を測定しているかどうかを確かめるために、基準関連妥当性の検討として、落合 (1983, 1989) による孤独感尺度 (LSO) との関連を見る。LSO は青年期の孤独感を、人間同士の理解・共感の可能性についての感じ (考え) 方 (LSO-U) と、自己 (人間) の個別性への自覚 (LSO-E), という 2 つの次元から捉えようとするものである。ここでは LSO-E との関連を見ることが主となるが、LSO-U も EESR と内容的には共通点があり、次のような予想が可能となる。

共感性の類型を考えた場合、両向型は共有型に比べ、自他の個別性の認識が高いため、LSO-E が高くなるだろう。しかし、LSO-U については、両向型と共有型の間に大きな差はみられないだろう。不全型は、個別性の認識は高いが、他者との理解・共感に否定的な感じ方をすると思われ、LSO-E は両向型と大きな差はないであろうが、LSO-U は両向型や共有型に比べ低くなるだろう。両貧型は、個別性の認識がなされておらず、かつ他者との感情的な交流の経験が乏しいと考えられ、LSO-E は共有型と同様に低くなり、LSO-U は不全型と同様に低くなるだろう。

(3) 共感性類型について、各類型の特徴を明らかにするため、菅原 (1984) による自意識尺度 (self-consciousness scale) との関連を検討する。自意識尺度は、私的自意識 (以下 PriSC と略す) と公的自意識 (以下 PubSC と略す) の 2 尺度からなり、前者は自己の内面や感情、気分など、自分自身の内省から捉えられた自己への意識度を、後者は自己の容姿や言動など、他者の眼を通した自己への意識度を測定する。共有経験ならびに共有不全経験は、どちらも対人関係の中で生じる体験を、自己が認知し意識する過程とみることができ、自意識尺度との関連を検討することは、共感性類型に知見を加えると

考えられる。

1. EESR の作成と共感性の類型化

被験者

国立大学院生、学部生、医療専門学校生 302 名 (男子 157 名、平均年齢 25.2 才、女子 145 名、平均年齢 21.2 才)。

質問項目の作成

EES の「対人関係の保持の因子」からなる第 2 尺度は、第 1・3 尺度に対する逆転項目にあたるが、“相手の気持ちを感じとろうとしたことはない”にみられるように他者への能動的な関与そのものを否定した表現となっている。共有不全経験を測定しようとする場合は、他者の感情表出に際して、その他者の感情を感じられなかったという表現にし、また第 1・3 尺度に対応した形の独立した尺度に変更する必要がある。項目の構成としては、共有経験測定項目と共有不全経験測定項目の 2 群からなる。共有経験測定項目については、EES の第 1・3 尺度から各々因子負荷量の上位 5 項目、計 10 項目を選び、また、それらの内容を否定する項目を共有不全経験項目 (否定感情に対する 5 項目と肯定感情に対する 5 項目の計 10 項目) とする。

手続

用意された EESR のための 20 項目を、LSO、自意識尺度とあわせてランダムに配置し、集団法により実施した。回答形式は「どちらともいえない」を中心に「まったくあてはまらない」から「とてもあてはまる」までの 7 件法にて行った。EESR のための項目については、経験の有無を問うため、回答形式は論理的に「ある」か「ない」を答えさせるべきところである。しかしながら、見せかけの望ましさが反映されないよう、他の尺度とあわせてランダムに配置する必要があると考えられたため、「以下に書かれている各文が、どの程度あなたに当てはまるかを答えて下さい」と前書きし、各項目と被験者の適合度を見る形式とした。したがって、「どちらともいえない」と回答する場合は、ある設問に対する被験者の適合度の判断は中立とみなし、その設問上の経験の有無は「ある」とも「ない」ともいえない中程度の意識と捉えることとした。また、「まったくあてはまらない」では適合度は低いと考えられ、その経験に対する意識は低く、「とてもあてはまる」では適合度は高いため、その経験が強く被験者に意識されていると捉えることにした。時間制限はなし。

尺度項目の分析

考案された 20 項目について、各々の回答に 0 点から 6 点を与え得点化した後、因子分析を行った。因子分

析は主因子解とバリマックス回転を行い固有値1.0以上を基準に3因子を抽出したが、第3因子は因子負荷量の高い項目がみられず、改めて2因子に設定して同様の因子分析を行った。その結果をTABLE 1に示す。

TABLE 1 尺度項目と因子分析の結果（バリマックス回転後）

項 目	因子負荷量		
	第1因子	第2因子	第3因子
1. 腹を立てている人の気持ちを感じようと、自分もその人の怒りを経験したことがある。	.63	-.13	.43
2. 悲しんでいる相手の気持ちを感じようと、自分もその人の悲しさを経験したことがある。	.62	-.05	.39
3. 何かに苦しんでいる相手の気持ちを感じようと、自分も同じ様な気持ちになったことがある。	.69	-.14	.51
4. 不快な気分である相手からその内容を聞いて、その人の気持ちを感じとったことがある。	.62	-.10	.45
5. 相手が何かを恐がっているときに、その人の体験している恐さを感じとったことがある。	.63	-.01	.40
6. 相手があることに驚いたと語るとき、その人の驚きを自分も感じとったことがある。	.55	-.08	.31
7. 相手が何かを期待しているときに、そのわくわくした気持ちを感じとったことがある。	.52	-.03	.28
8. 相手が楽しい気分になっている場合に、その楽しさを感じようと、その人の気持ちを味わったことがある。	.75	-.04	.57
9. 相手が「こんなことがあって、とてもびっくりした」と話すのを聞いて、その人の気持ちを感じようと、自分も驚いた気持ちになったことがある。	.74	-.05	.69
10. 相手が喜んでいるときに、その気持ちを感じとって一緒にうれしい気持ちになったことがある。	.72	-.04	.52
11. 相手が何かに腹を立てても、自分はその人の怒りがぴんとこなかったことがある。	-.05	.46	.30
12. 悲しんでいる相手といても、自分はその人のように悲しくならなかったことがある。	-.19	.61	.40
13. 相手が何かに苦しんでも、自分はその苦しさを感ぜなかったことがある。	-.09	.69	.56
14. 不快な気分である相手からその内容を聞いても、自分は同じように不快にならなかったことがある。	-.12	.66	.46
15. 相手が何かを恐がっていても、自分はその恐さを感じなかったことがある。	-.05	.54	.32
16. 相手があることに驚いたと語っても、どうしてそんなに驚くのかわからなかったことがある。	-.09	.51	.28
17. 相手が何かを期待していても、同じようにわくわくしなかったことがある。	-.02	.60	.42
18. 相手が楽しい気分であっても、自分はその人のように楽しく感じなかったことがある。	.09	.69	.53
19. 相手が「こんなことがあって、とてもびっくりした」と話すのを聞いても、自分は驚いた気持ちにならなかったことがある。	-.09	.77	.66
20. 相手が何かに喜んでいても、自分はうれしい気持ちにならなかったことがある。	-.06	.75	.56

寄与率 5.09 3.38 8.48
寄与率 25.5 16.9 42.4

因子負荷量.45を項目選択の基準とし、第1尺度には共有経験測定用の10項目、また第2尺度には共有不全経験測定用の10項目が選ばれ、当初の項目作成の意図を反映した結果が得られた。次に両尺度間の相関係数（Pearson）を求めたところ、 $-.25$ ($p<.01$) と有意ながらも低い負の相関がみられた。したがって、一元的に第1尺度の逆転項目群として第2尺度を捉えるのではなく、独立した項目群と考える方が妥当と思われる、第1尺度を「共有経験尺度（scale of sharing experience : SSE)」、第2尺度を「共有不全経験尺度（scale of insufficient sharing experience : SISE)」とみなし、EESRを両尺度から構成するものとした。

信頼性の検討

折半法（Spearman-Brown の信頼性係数）を用いて両尺度の信頼性が検討された。その結果、共有経験尺度において.87、共有不全経験尺度において.82という数値が得られ、EESR の信頼性が確認された。

共感性の類型化

SSE と SISE の平均値、標準偏差、中央値、最頻値を、TABLE 2 に示す。各々の中央値（SSE : 39, SISE : 32）を基準に高得点群と低得点群に分け、2尺度の組み合わせ（両向型 : SSE 高得点・SISE 高得点、共有型 : SSE 高得点・SISE 低得点、両貧型 : SSE 低得点・SISE 低得点、不全型 : SSE 低得点・SISE 高得点）から、共感性の類型化を行った。その結果、両向型は63名（男子23名、女子40名）、共有型は72名（男子25名、女子47名）、両貧型は44名（男子32名、女子12名）、不全型は69名（男子48名、女子21名）に分類された。性差を検討するため2（性別）×4（類型）分割で χ^2 検定を行った結果、有意差がみられた（ $\chi^2=30.74$, $df=3$, $p<.01$ ）。次にどの類型に差があるかを見るために、1つの類型とそれ以外の2×2分割の形にし χ^2 検定を行った結果、女子は有意に両向型（ $\chi^2=7.71$, $df=1$, $p<.01$ ）と共有型（ $\chi^2=11.59$, $df=1$, $p<.01$ ）が多く、男子は両貧型（ $\chi^2=9.55$, $df=1$, $p<.01$ ）と不全型（ $\chi^2=12.34$, $df=1$, $p<.01$ ）が有意に多くみられた。

TABLE 2 SSE と SISE の統計値

	平均値	標準偏差	中央値	最頻値
SSE	38.53	8.57	39.00	40.00
SISE	32.26	8.84	32.00	30.00

2. 共感性の類型とLSOの関連

LSOの下位尺度（LSO-E, LSO-U）について、共感性4類型×性別2の分散分析を行った。その結果を

TABLE 3 に示す。LSO-E において共感性類型の主効果が認められたため、下位検定を行った結果、両向型と不全型が共有型よりも有意に得点が高かった ($p < .05$)。また LSO-U についても、共感性類型の主効果が認められた。下位検定を行った結果、共有型がその他の類型よりも有意に得点が高く ($p < .05$)、また両向型は両貧型と不全型よりも有意に得点が高いことが示された ($p < .05$)。

TABLE 3 LSO についての条件別の平均値 (S.D.) 及び分散分析の結果

LSO-E		共感性類型				
		両向	共有	両貧	不全	
性 男子	別 女子	26.83	23.24	24.41	26.07	25.22
		(7.04)	(5.87)	(5.65)	(6.95)	(6.50) 主効果
26.85		24.00	25.67	26.33	25.52 n.s.	
(5.63)		(5.18)	(4.87)	(4.64)	(5.31)	
		26.78	23.74	24.44	26.13	交互作用 n.s.
		(6.11)	(5.36)	(5.74)	(6.23)	
		主効果 F(3.223) = 3.84**				
LSO-U		共感性類型				
		両向	共有	両貧	不全	
性 男子	別 女子	37.22	38.76	34.97	31.94	35.00
		(6.86)	(6.02)	(7.21)	(7.61)	(7.50) 主効果
37.35		41.04	34.42	35.05	38.10 n.s.	
(6.79)		(5.72)	(4.46)	(4.68)	(6.32)	
		37.24	40.25	34.50	32.99	交互作用 n.s.
		(6.69)	(5.84)	(6.77)	(6.95)	
		主効果 F(3.223) = 20.03**				

$^{**} p < .01$

3. 自意識尺度との関連

PriSC, PubSC について、共感性 4 類型×性別 2 の分散分析を行った。その結果を TABLE 4 に示す。PriSC については、共感性類型の主効果が認められたため下位検定を行った結果、両向型と共有型が、両貧型と不全型より有意に得点が高かった ($p < .05$)。PubSC については、性別と共感性類型の主効果が認められた。性別は女子が男子よりも有意に高かった ($p < .01$)。共感性類型について下位検定を行った結果、両向型がその他の類型よりも有意に得点が高いことが示された ($p < .05$)。

TABLE 4 自意識尺度についての条件別の平均値 (S.D.) 及び分散分析の結果

PriSC	共感性類型				
	両向	共有	両貧	不全	
性 男子	45.26 (7.18)	42.34 (8.21)	36.09 (8.21)	36.02 (7.70)	38.90 (8.65) 主効果
	別 女子	44.25 (7.50)	42.27 (6.63)	38.67 (7.60)	37.38 (7.12)
		44.69 (7.27)	42.17 (7.16)	36.47 (8.25)	36.50 (7.47)
主効果 $F(3.223) = 17.01^{**}$					

PubSC	共感性類型				
	両向	共有	両貧	不全	
性 男子	43.56 (11.77)	42.00 (8.41)	38.38 (9.62)	39.42 (6.66)	40.41 (8.95) 主効果
	別 女子	47.07 (8.63)	43.15 (8.58)	43.83 (8.13)	44.71 (7.80)
		45.63 (9.97)	42.75 (8.41)	39.22 (10.30)	40.87 (7.45)
主効果 $F(3.223) = 6.23^{**}$					

$^{**} p < .01$

考 察

1. EESR の作成と共感性の類型化について

EES は共感性測定尺度としては、角田 (1992) に示されたように、他者理解には至らない共有経験も共感と評価され、妥当性に問題があった。この点を改善することを目的に EES の改良がなされた。共有不全経験を測定する尺度を加えるという新たな試みがなされ、20 項目が準備された。因子分析の結果から、SSE10 項目と、SISE10 項目が選択され、共感経験尺度改訂版 (EESR) とされた。

SISE は SSE の逆転項目をその内容としている。共感性尺度の逆転項目については、Mehrabian & Epstein (1972) を元に加藤・高木 (1980) が情動的共感性尺度を作成した際の因子分析結果や、角田 (1991) の EES 作成時の因子分析結果に示されたように、1 因子としてまとまる傾向があるといえる。本研究では、こうした結果をもとに、逆転内容を独立した尺度として扱うことによって、自他の個別性の認識を測定しようと試みた。SISE は EES における第 2 因子とは異なり、内容否定の強調点が変更された。すなわち、EES においては他者を理解しようとする能動的関与そのものが否定されるのに対し、SISE においては「他者の感情表出に際し

て、その他者との共有体験が得られなかった」という内容にされた。角田（1991）では、逆転項目群である第2尺度と、第1・3尺度との相関は.49と.46であった。今回のSISEとSSEの相関は絶対値で.25であり、単純に比較することはできないが、角田（1991）に比べて低い相関になったとみることができるだろう。本研究で想定された両向型、共有型といった共有経験の高い者は、どちらもEESの第2尺度の項目に対しては共に否定的に反応し、結果的に両者の識別を困難にしていたと考えられる。しかし、SISEの項目表現は、他者の感情表出に際した共有不全経験を問うものであり、対人関係そのものの否定とはなっていない。ここでSSEとの相関係数が低かったことは、SISEにおいては両向型と共有型が異なる回答をするために差が生じ、その結果、両尺度の関係が弱くなったと考えることもできるだろう。

共感性類型度数の性差については、女子に両向・共有型が多く、男子には両貧・不全型が多いことが明らかとなった。つまり、女子は共有経験が高く、男子は共有不全経験が高いといえよう。この結果は、従来言われている女子の方が男子よりも共感性が高いという結果（角田, 1991）に大まかに対応すると考えられるが、それが必ずしも共感性の高さとは言いきれない点を考慮する必要がある。つまり、女子は確かに共有経験は高いが、共有型に分類される割合も高く、必ずしも自他の個別性の認識をふまえた共感性の高さとはいえないのである。

2. 基準関連妥当性について

EESRに基づく共感性の類型と、LSO-EならびにLSO-Uの関連を見たが、ほぼ当初の仮説を支持する結果が得られた。

LSO-Eについては、両向型と不全型が共有型よりも高く、個別性の認識が高い結果が得られた。特に両向型と共有型に有意差がみられたことは、本研究の主要な目的である自他の個別性の認識に基づいた他者理解につながる共感と、他者理解に到らない共有経験（未熟な共感性・他者の否定感情に対する同情）の識別が、EESRに基づく類型によってなされうること示しているといえるだろう。不全型についても予想された傾向がみられたが、両貧型についてはその位置づけは明確化されなかった。

LSO-Uについては、共有型がそれ以外の類型のいずれよりも高く、LSO-Eが低得点であったこととあわせて考えると、楽観的に人間同士の理解・共感の可能性を信じているとみることができる。こうした対人観

のあり方は、自他の個別性の認識が未分化で自己本位的な関係を反映したものと考えられ、共有型の特徴を示すものであろう。両向型は共有型に次いで高得点であり、両貧型ならびに不全型よりも得点が高かった。SSE高得点群（共有・両向型）とSSE低得点群（両貧・不全型）といった共有経験の差は、対人的な感情の交流のあり方の差といえ、対人理解の可能性の感じ方あるいは考え方にもそれが反映するものと考えられる。

以上のように、LSOとの関連から、EESRによる共感性の類型化は、当初の予想をほぼ支持する結果が得られ、基準関連妥当性を満たすものと考えられる。

3. 自意識尺度との関連について

共感性類型と自意識尺度の関連をみると、まずPriSCにおいては、両向型と共有型が、両貧型と不全型よりも有意に得点が高い結果が得られた。両向型と共有型は、どちらもSSEの高得点群であり、共有経験の高さが内省的な私的自意識に関連を持つことを示している。共有経験は他者との情緒的なつながりを持つ経験であり、基本的に自己にとって肯定的あるいは快的な経験といえる。LSO-Uにおいても両群が高得点であったが、共有経験の高得点者は他者そして自己への肯定感を持つと考えられる。共有経験が生じる心的過程を考えると、自己は他者との相互作用の中で他者と類似の感情が喚起されるが、その感情を意識できなければ共有経験とはならない。すなわち、他者の感情を共有し意識するということは、言い換えるとそれを感じる自己の感情状態についての認知をも必要とするといえる。両向型と共有型は、どちらかというとも良好な対人関係を背景にもち、自らの感情や気分についても内省的に捉えることができるといえる。しかし、LSO-Eとの関連でみたように、自他の個別性の認識という点では差があるため、共有型には自他の相違を意識するような側面についての内省はなされにくいと推測することもできる。他方、両貧型と不全型は他者との感情的な交流経験が少なく、対人関係はあまり良好とはいえないと思われる。このことは自らの状態に対する内省的な認識の困難さと表裏の関係にあると思われる。両貧型と不全型は自己に対しても他者に対しても内的状態の把握が困難といえるようである。

PubSCについては、共感性類型では、両向型がその他の類型に比べて得点が高い結果が得られた。PubSCは他者の眼に映る自己を意識する程度を測定するものであり、PubSCが高い者は対人相互場面において他者からの評価に敏感（Fenigstein, 1979）といえる。PubSCと対人不安意識との正の相関（菅原, 1984）ともあわせて

考えると、この傾向は従来の共感性研究で注目されていた感情的被影響性や個人的苦痛 (personal distress), あるいは橋本と角田 (1992) が「動揺しやすさ」と命名した側面に関連するものと思われる。本結果にみられるように他者の眼を意識することと両向型の関連を考えるならば、共感性には他者を意識しその評価に動揺しやすい側面が必要とみることもできるだろう。個人的苦痛の測定が共感性を測っているかを疑問視する見解 (Eisenberg & Strayer, 1987) や、EES の作成時の観点①にみられたように、受動的な動揺しやすさが高すぎる場合は、自己はコントロールを失った状態となり、他者理解はおろか共有経験の認識ももてず、共感することは困難となろう。しかし、両向型の場合は、自己を固定化することなく、対人関係の中で融通性あるいは自由度をもった揺れを許容することができると考えられ、その揺れの能力が共有経験や不全経験を含む様々な対人関係上の体験の認識を可能にさせているのではないだろうか。他方、共有型は、自己本位的なあり方から、他者との関係で動揺することはなく、両貧型は、両経験の低さから考えて、他者の眼を意識するだけの自己が形成されていない、あるいは対人関係から引き籠もった状態にあるのかもしれない。また不全型は、自己を意識するだけの他者との関わりがもてないともでき、何らかの防衛的な対人距離のあり方に関連するのかもしれない。

性差では、女子が男子よりも、他者の眼から自己を意識する傾向を持つといえる。共有経験の高さともあわせてみると、女子は男子よりも他者に眼が向いており、情緒的な対人関係をもちやすいといえるだろう。

4. まとめ

「共感」概念は、肯定的な概念で社会的に望ましい人格特性といえ、質問紙法による測定尺度では肯定的な反応が得られやすい面があると考えられる。EES ではこうした傾向をできるだけ排除するため、経験の制約を設けるなどの試みがなされたが、共感と同情の区別といった面で問題点が残されていた。本研究においては、これまでの共有経験の測定尺度に加え、共有不全経験尺度が考案され、両尺度を独立して扱うことによって、共感性測定の妥当性を高める試みがなされた。両尺度の得点をもとにした類型化から共感性が評価され、LSO との基準関連妥当性の検討と自意識尺度との関連が検討された。以下に 4 類型を共感性の高いと思われる順番に示し、それらの特徴をまとめてみる。

「両向型」は SSE と SISE の両面が高く、自他を独立した存在として捉えることができおり、共感性が 4

類型の中で最も高いと考えられる。対人世界に信頼感をもちながら適度な動揺しやすさも有すると思われ、自己の感情体験を内省する力をもっている。

「共有型」は SSE のみが高く、個別性の認識は低く、共有体験を自己に引きつけてしまう未熟な共感といえる。対人関係には楽観的な態度をもち安定しているといえる。自己の内省力は高く見えるが、自他を独立した存在とはみることができない未分化な状態にあり、本当の意味での自己理解ならびに他者理解はなされにくいと思われる。

「不全型」は SISE のみが高く、他者との共有体験は得られにくい。自己と他者の間に越えがたい障壁があり、そうした意味での孤独感をもち、対人世界への信頼感が低いといえる。自意識は低い、不全経験を意識していることから考えて、潜在的には他者と関わりをもとうとしながらも、他方でそれを阻む面をあわせもつと推測される。

「両貧型」は SSE と SISE の両面が低く、対人関係そのものが弱く、共感性は最も低いと考えられる。対人的な信頼感は低い、不全型とは異なり自他の個別性の意識の高さに関連しているとは言えない。自意識の低さとあわせて、自己の形成が弱い、無気力、無関心といった傾向をもつと推測される。

以上のように各類型がまとめられたが、今後さらに他の測定方法や人格特性との関連から、それらの特徴を明確にする必要があると思われる。

引用文献

- Davis, M.H. 1980 A multidimensional approach to individual differences in empathy. *JSAS Catalog of Selected Documents in Psychology*, 10, 85.
- Eisenberg, N. & Strayer, J. 1987 Critical issues in the study of empathy. In N. Eisenberg & J. Strayer (Eds.) *Empathy and its Development*. Cambridge University Press.
- Fenigstein, A. 1979 Self-consciousness, self-attention, and social interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 75—86.
- 橋本 巖 1987 感情理解に伴う「わかりにくさ」とその発達 九州大学教育学部紀要 (教育心理学部門), 32, 1, 71—80.
- 橋本 巖 1991 感情の「わかりにくさ」に関する信念と青年の孤独感・共感性の関係 鳴門教育大学研究紀要 (教育科学編), 6, 173—186.

- 橋本 巖・角田 豊 1992 感情の「わかりにくさ」に関する信念と青年の孤独感・共感性の関係（II）愛媛大学教育学部紀要 第I部 教育科学, **39**, 1, 63—74.
- 角田 豊 1991 共感経験尺度の作成 京都大学教育学部紀要, **37**, 248—258.
- 角田 豊 1992 共感経験尺度の妥当性 —VTRを刺激とした感情内容別検討— 教育心理学研究, **40**, 178—184.
- 角田 豊 1993a 共感性と母親から共感されるイメージとの関連 —自己対象機能の観点からみた共感性と性差について— 心理臨床学研究, **10**, 3, 76—81.
- 角田 豊 1993b 臨床的にみた「共感」の再検討 鳴門教育大学研究紀要（教育科学編）, **8**, 77—87.
- 加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における情動的共感性の特質 筑波大学心理学研究, **2**, 33—42.
- Kohut, H. 1971 *The Analysis of the Self*. New York : International Universities Press.
- Mehrabian, A. & Epstein, N. 1972 A measure of emotional empathy, *Journal of Personality*, **40**, 525—543.
- 落合良行 1983 孤独感の類型判別尺度（LSO）の作成 教育心理学研究, **31**, 60—64.
- 落合良行 1989 青年期における孤独感の構造 風間書房
- 菅原健介 1984 自意識尺度（self-consciousness scale）日本語版作成の試み 心理学研究, **55**, 184—188.

付 記

本調査のデータ集計にあたって、鳴門教育大学大学院修士課程の野上日呂子さん（現・新潟県六日町立城内中学校養護教諭）の協力を得ました。ここに記して感謝の意を表します。

（1993.10.28受稿，'94.3.11受理）